



第4号
昭和61年5月

古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 A C T内

定期講演会のご案内

演題 「多元史観の新発見」
日時 六月八日(日)
午後一時三十分～四時三十分

会場

通運会館
電話03-253-5219

会費

千二百円(但し会員千円)
(千代田区外神田三十一番一十八号地下鉄銀座線末広町下車)

我が国の古代史学は、敗戦によって一画期を迎えた。一は、皇国史観による戦前史学、他は、津田左右吉の記・紀の神話・説話「造作説」による戦後史学であり、この二者は、意外にも一の核心の思想を共有している。即ち天皇家中心の一元史観、すなわち、この日本列島の代表の王者、権威と権力の「統一」中心は、近畿天皇家以外になし。という信念であった。

古田氏は、昭和四十四年「史学雑誌」に論文「邪馬臺国」を世に問うて以来、日本古代史に関する、中国等の国外文献、また記・紀、風土記、金石文等の国内史料、また考古学上の出土物状況を無理なく理解することによって、旧来の一元主義史観では到底説明できず、多元史観の妥当性を認めざるを得なかったのである。昭和五十八年、それまでの研究成果をまとめた論文集「多元的古代史の成立(上)(下)」は、一元主義史観に固執し続ける学者・研究者に対する警鐘の書でもあったが、今だに氏の学説上の継承者は現われていない。無視という名の逃避であろう。

しかし、若干の、いや、考えようによれば、変化のうねりともいえる昭和六十一年三月、朝日新聞主催のシンポジウム「古代の謎・出雲を問う」への氏の講師参加である。「多元的古代史の成立」発刊後、「古代は輝いていた」三部作、「古代史を疑う」、「古代の霧の中から」等で古田説の大筋は固まったかに見える。

しかし古田氏は、まだまだ古代史研究は続けなければならぬと文献解説を努力を惜しまない。このたび京都での弁護士生活に一応のピリオドをうち、東京生活に入った奥様の存在は、氏にとって大変な力である。

昭和六十一年度 年会費納入のお願い(年会費千円)

当会も、正式発足後、今年で四年目を迎えました。その間、会の充実のため会費値上げの話もりましたが、お蔭様で運営に支障はきたしていません。ここに郵便振替用紙を同封いたしましたので、よろしく。

娑羅の会講演会

日時 五月二十日(火)
午後二時三十分～四時三十分

場所 台東区根岸社会教育会館

電話 03-876-2103
(地下鉄日比谷線 三ノ輪駅下車。南出口より一分)

演題 「縄文の霧と弥生の真実」

会費 七〇〇円(資料代別)
連絡先 「娑羅の会」 藤原としえ
電話03-872-5880

修験道史料にみる

「九州年号」(一) 八王子市 谷本 茂

(承前)瀬戸内海の大三島に伝わる「伊豫三嶋縁起」(前半の縁起部分は十四世紀後半成立、系図を含めた全体は、十六世紀前半成立か。愛媛県越智郡大三島町にある大山祇神社に関する記録)の中にも、「九州年号」が幾つか現われている。

金光三層殿。扶桑州蝦蟇州流泉州高麗國軍渡。彼氏子献亡。
卅三代崇峻天王位。此代從百濟國佛舍利渡。此代端政元曆。
卅四代推古天王位同二曆。
転願元年。從異國渡同亡。
卅七代孝德天王位。番匠初。常色二載。日本國御巡礼給。
卅九代天智天王位。自是藤原氏初。同大政大臣冠。同白鳳元年。自端政二年(至)永和四年以七百十九年也。自大宝元年至永和四年六百七十八年。

右例中、転願元年辛丑は、願転元年辛酉の誤写かと思われる。(「海東諸国紀」は煩転、「東国通鑑」は願転、「如是院年代記」、「襲国偽借考」などは願転とする。)その他のものは、いわゆる「九州年号」(白鳳元年を辛酉とする系統)と一致する。

紙幅の都合で、他の幾多の例は割愛せざるをえないが、今後とも、各地の史料の中に、「九州年号」の「発掘」は続いていくであろう。

「九州年号」の使用例が多数「発見」されてきた現在、これらの年号を「個人の机上の創作」として処理することは、ますます困難になってきたといえよう。

もうひとつの古代史

横浜市 田島芳郎

古代史の研究というと、まず文献があり、次に考古学から入っていく方法がある。ここでもうひとつ視点を変えて、もうひとつの面白い世界をのぞいてみたい。

昭和41年、岩波新書から中尾佐助の「栽培植物と農耕の起源」が出た。欧米の学者の農耕起源一元論を根柢からひっくり返したこの本は、一種の文明的な要素をも含んでおり、民族学や文化人類学はこれ以後その相貌を一変した。中尾は学者は絶えず自説を修正すべきであると、今の説はこの本の内容とはかなり違ってきているが、それでもこれが世に出たことの価値はいささかも減じない。コペルニクスの「天球回転論」に匹敵する路標的名著である。

これ以来、照葉樹林文化が提唱されたのをはじめ、鎖が解かれたように次々と新しい意見が出され、佐々木高明の縄文焼畑農耕論、渡部忠世の稲の起源研究など、めざましい成果を得つつある。日本民族のアイデンティティを探る研究は非常にさかんになった。徳間書店の中尾佐助・上山春平「日本文化の系譜」は格好の入門書である。

従来の学者は農耕の起源、すなわち現代文明の起源を、メソポタミアからパレスチナに至る半月弧に置いた。それに対して中尾は複数の起源地をあげる。昭和45年頃には、雲南を中心とする東亜半月弧という概念を打ち出した。これ以後、雲南こそ日本文化の故郷だと先走りした連中

が、我も我もと雲南に入っていく。東亜半月弧、照葉樹林文化、納豆の大三角(日本・ブータン・ジャワ)、スシベルト(日本・中南支ーインドシナーボルネオ)、モチ文化、楨林文化、ヤシ文化など、十数年の間に中尾は様々な概念を提唱した。

このようなグローバルな視点を与えられて、縄文文化の研究も格段の進歩を示した。鳥浜貝塚は縄文のタイムカプセルと呼ばれるが、前期の地層からヒョウタンやリョクトウが出て、驚きはしても間違いない。う人はいかなかった。縄文後晩期に焼畑農業が行われていたという説が勢いを持っていったからこそ、晩期の水田社発見にも比較的冷静に対処できたのではなからうか。

アフリカ原産のトウジンビエ、シコクビエは、ヒョウタンと共にインドに伝わった。雲南を中心とする温帯モンソーンの照葉樹林帯では、トウジンビエは受け取らなかった。日本へはシコクビエ、インド原産のキビ、照葉樹林帯で新たに栽培化されたイネ、ヒエなどが、ヒョウタンやインド原産のリョクトウと共にやってきた。それらは焼畑で輪作されていた。縄文時代のイメージは、もはや毛皮のパンツの野蛮人ですませてはいられなくなっている。

勿論北から入った文化もある。中尾が楨林文化と名付けたもので、東日本に広がるヨーロッパ型のオオムギや、ヨーロッパ原牛類の和牛のルーツは北にある。あの素晴らしい火炎土器や亀ヶ岡式土器を生んだ日本海側の文化圏が、海の向うと交渉しなかつたと考えるほうがおかしいの

ではないか。古代史のコペルニクス・古田武彦氏の「邪馬台国」はなかったが、出て15年、ようやく歴史学も、古田説を無視しては立ちいかなくなってきた。縄文前期の地層からヒョウタンが出て驚かないのに、出雲から銅剣が出て周章狼狽するありまは、いささか滑稽ですらある。



朝日ゼミナールをきく

杉並区 黒田純子

一月三十日から四回、古代の日本を問う。というテーマで朝日ゼミナールが開かれ、その最終回は古田先生のお話であった。四回を通して聴講したのでその一端をのべたい。

第一回は小林達雄先生。縄文時代の出土品からみた稲作以前の食生活を中心とした話。縄文時代は土器を使つて煮炊きをするようになり、食料事情が安定したこと、縄文人の食物は、鳥獣魚貝木の実等々多種多様で、貯蔵や保存方法も知っており、自然のバランスを崩さず豊かな食生活をしていたことには驚きである。

集落は広場を囲んで円形に住居をつくり、老人も孫も一緒に住んで文化の伝承が始まった。村といつても五十軒程度で、この時代は大規模な集落はなかつたという。古田先生の縄文一万年一括すべきでない、縄文に権力発生の説への言

及なく残念。

第二回は森浩一先生。最近の出土品を中心に青銅器をめぐる話である。韓国勸島の弥生式出土品、細型矛から日本との交流関係の話へと続いた。荒神谷遺跡については地下に埋めた時期を考えるのが大切とのこと。出雲でも東と西で出土品に違いがあり、北九州の宗像が出雲の西にながりがあつたのではないかという話は、古田先生の九州王朝、出雲王朝とどうつながるか。また邪馬台国、狗奴国及び女王国東千里倭種の国とは関係あるのかどうか。

第三回は大塚初重先生。水田跡が語る弥生人の生活についてである。水田跡は北九州から青森まで広く分布しており、垂柳遺跡(青森県)の水田跡には、弥生人が水田でどう動いたかという。弥生人の村をあげて協業で稲作に取り組んだ姿が今日の大地に見られるのは興味深い。巨大な青銅祭器を持つ権力者との関わりはどうだったのだろうか。

最終回は古田先生。これまでの出土物中心の話から一転して神話によって古代を考える話である。国生み、国ゆずり、国引きと、どの神話も古代の真実をはっきり語っていたことが、最近の相次ぐ出土物で証明されていくこと、黒曜石の産地との関係などこれまでの話を反すうしつづつ何う。最後は大阪の磐船神社と巨石信仰、遷芸速日命説話との関係をスライドを加えての説明であつた。

終わつて、古田説が次第に市民権を得つつあることを感じた。

シンボジュウム「古代の謎出雲を問う」を聞いて

杉並区 吉田堯躬

「出雲神話と発掘物とを安易に結びつけるなど主張する人が、天皇家祖先神たる天照大神のカタシロとして配布されたものとするとは」という趣旨の厳しい指摘がされた時、シンボジュウムは最高潮に達した。

荒神谷の三五八本の「銅剣」、一七本の銅矛及び六個の銅鐸の隣接埋蔵の発掘は、出雲王国の存在を意味するかどうかは、シンボジュウムの最大関心であるが、「近畿天皇家のカタシロとして銅剣が各地に分配された。生産地は近畿で、出雲はその配送センターであり、必要性がなくなった時、大和の指令で埋めた」とする水野正好教授説と、記紀分析から出雲王朝の存在を予測していた古田説とは、司会の大塚初重教授が予想されたように、真向うから対立した。

発掘現場を指導された蓮岡法暉氏のスライドを使用した説明、山陰地方の弥生期遺跡、遺物と今回の出土物との関連に言及しながら、出雲神話とその弥生文化との仲介項の必要性を主張される田中義昭教授、出雲の富の集中原因を朝鮮との通交権と宗教王国としての性格に示唆された原島礼二教授と、それぞれの持味のある意見発表があり、論戦も、青銅器の埋没の時期、生産地、製作集団、出雲王国、統一国家の成立期等に大塚教授により整理されつつ行われた。

論争の印象を簡単に述べると、第一に、威勢のよい水野説ではあるが、学問的にはすでに成立の余地がない

ことは明白になった。第二に、古田説は、出雲王権の成立面では支持があるものの、他の講師にとつて、全体の古代史像との関係では取扱いかねている状況にある、第三に、出雲王権の変動について、考古学上の出土からの発言は慎重である、などである。

古田先生は、①津田史学—記紀造作説の崩壊、②縄文と出雲統一国家との関連、③「銅剣」は八千矛の神の矛でないか、④風土記の「朝廷」は出雲の四つを問いかけたが、③を除いて、結局触れずに終わったのは残念である。

③については、考古専門家が強く反撥し、剣としての使用と思われる木柄ありとしていたが、弥生期の人々が「銅剣」を何という言葉で呼んでいたのかの問い——伝承との関りにとまどっているかとも思わせた。

②については古田説は、隠岐の黒曜石をバックとする富とそれを防衛する軍事力による統一国家成立にあると理解しているが、私には若干の疑問がある。

それは、黒曜石では、前銅鐸国権力(東鯉国?)、眞脇遺跡の勢力、或いは東北の縄文圏を説明し切れないのではないか。むしろ交通の要衝における富の蓄積——その確保のための武力、そしてそれによる黒曜石その他材料生産地の支配——とした方が権力発生を説明しうると考えている。

②のテーマがとりあげられ、それにそつての議論の展開があればと期待したのであるが。

今回のシンボジュウムに古田先生が招かれたことは、昨年の好太王碑

シンボジュウムに不当に無視されただけに嬉しい気持である。古田説が我々会員達だけでなく、古代史を愛する人々に広く市民権を得つつある——古代史学会の大勢を除いて——ことを示すものであろう。

最後に、「古田が出るなら参加しない」という姑息な態度を取らず、堂々と論陣を張った水野教授には、新しい動きとして感謝したい。

私と「古田説」との出会い

国立市 小幡雅男

北風をまともに受けた吹きさらしの桑畑の中、「おい、ここにもあったぞ!」という声が聞こえてくる。乾いたアカギレの手で関東ローム層の土塊を探っていると、黄土色の細土片が手に触れてくる。よく見るとそのような土片は鋤き返えされた畑土に混ざっていくらでもあり、傾きかけた夕日を背に土片をかざして見ると、縄文模様がかすかに形どられていくのがわかった。

その頃中学生であった私は、仲間達と一端の考古学少年気取りで故郷群馬県太田市周辺に点在する円墳、前方後円墳、方墳の横穴式石室にもぐりこんだり、縄文式の土片を採集したりしていた。昼には古墳が庭先にあった農家の縁側で、竹林や「櫻グネ」をザワザワと揺りながらわたる風の音を聞きながら塩むすびを頬張ったものであった。

市内には個人所有の考古館があり、訪ずれた折、「今は平地の田畑に無数の古墳があった」とを聞かされたことがあつたが、群馬県は全国有数の古墳県で、奈良県でさえ古墳が五

千足らずなのに、「昭和十年の調査で約八、四〇〇、実数は一万を越えていた」といわれている。特に赤城南麓、榛名東南麓、前橋、高崎、藤岡、そして太田周辺が多かった。市の東南部にあった「天神山古墳」は五世紀後半のものといわれ、全長二一〇メートル、東日本随一の大きさであった。周囲二重の濠跡は畑地に段差があつて、それとはつきりわかり、石棺が長持形であつたといわれていることからも事の重要性はおわかりいただけると思う。そして利根川をはさんで「さきたま古墳群」が存在しているが、当時はそれを知るよしもなかった。

当時、そして現在も、基本的には、「このように古墳が多いのは群馬県が大和朝廷の前進基地であつたこと象徴的」といふ認識であつた。この地を支配した古代豪族上毛野君は崇神天皇の皇子豊城入彦命の子孫といわれてきたが、古田先生の「関東に大王あり」、「多元的古代の成立」を職場の最も敬愛する先輩から御教示いただき、上毛野君、それ以前は群馬、栃木に勢力を拡げていた毛野の豪族は大和朝廷に拮抗する「大王」の一人という位置付けが浮かび上がってきた。また、「守」がなく「介」の官から始まる上野国の特殊性も謎めいてみえる。武人、馬の殖輪が多数出土し、さらに腰に「鈴」をつけた女人殖輪のことを想う時、故郷の古代の「輝き」を私なりに感じるのである。

(註1) 群馬県の歴史散歩(群馬文化の会)(山川出版社)より引用
(註2)

倭人以前のこと

武蔵野市 毛利一郎

甘酒の異称を三國一という。これは駿河、甲斐、相模の三國一の名物富士山のことで、富士山が一夜で出来たという伝説に基づいて、一夜作りの甘酒の異称となった(広辞苑)。伝説というものがバカにならないということとは古田武彦氏も強調されるところであるが、富士山が一夜で出来たとは、どういうことか。

「富士山は三階建てである。一番下が、数十万年前に出来た。次が二万五千年前。このときの高さ、ほぼ二千七百メートル。そして、最後のおよそ千メートルを積み上げるマグマの大噴出。これが五千年前」。

こういう地質学者の説を紹介したのは詩人宗左近氏で、この五千年前。すなわち縄文中期初頭のマグマの大噴出が、どれほど凄絶であったことか。天地もろともに裂ける大異変は何らかの形で、口誦で、あるいは土器の造型で、のちのちまで伝承されたのではなからうか、と宗氏はその「幻談縄文」に書かれたが、富士山が一夜に出来たという伝説も、この五千年前の事件から来ているのではないか。

この山の名は、二階建て時代までは別にあつたと思われるが、大爆発によって頂上千メートルの新しい山が積みみされるとともに、新しい呼び名が生じたに違いない。アイヌ語で火をブンチ、火山をブンチヌプリという。そのブンチがフジになった、という説を紹介されたのは登山文化史研究家谷有二氏であ

る。フジが文献に現れるのは、常陸風土記の福慈岳が最初で、その他、不二、不尽、富士などという漢字表記は当て字であろう。従ってフジ即ブンチ説は魅力があるが、谷氏がアイヌ語説をとることをためらわれるのは、北海道には秀麗な火山が沢山あるのに、フジという系統の山は一つもないからである。

確かに、富士が単に秀麗な火山というだけのことなら、他にも似た山が沢山ある。しかし五千年前の大爆発は、古代の日本列島人が直接経験したものとしては、類例があるまい。それは単に火山(ブンチヌプリ)というような常識的なものでなく、まさに火(ブンチ)そのものであつたらう。縄文人がそれをブンチと呼んだのではないか。とすれば縄文人の言語にアイヌ語が含まれていたことになる。また駿河国は和語圏に近く、ブンチがフジと和語化する機会には北海道より遙かに多いことも考慮に入れなくてはなるまい。

そのブンチを噴き出した五千年前は、実は縄文時代が円熟期を迎えた時期であつた(教育映画祭入選作品「縄文時代・自然環境と人びとのくらし」NHK教育テレビ60年9月23日放映)。富士のすそ野で生活していた人々は、宗左近氏も書かれた通り、この大爆発によって全滅したであろうが、日本列島全体としての縄文人は人口も増加し、栄えた。列島中央部では人口二十万以上といわれる。それは気候の温暖化によって木の实など主食を産出する落葉樹林が繁茂したからである。その縄文期が衰退に向つたのは三

千年前ごろより気候の寒冷化が始り(前記テレビ)、自然採取経済の主な食糧資源としての落葉樹林が衰退したからである。

五千年前には中国も温暖で、古気候学の鈴木秀夫東大教授によれば、水牛が遊び、竹が繁茂するという東南アジア的狀況が黄河流域まで達していたことが、化石などで確認されている(雑誌「歴史と人物」58年2月号「誤れる日本人起源論を正す・南方、北方系は即南方、北方起源にあらず」から)。堯、舜、禹などという伝説的な聖王や、禹が建てた夏王朝などが農耕を基礎として展開していた時代であつたらう。その気温が下がり始め、約三千五百年前に気温の急降があり、年平均気温三度Cの低下が百年くらいの間起つた。(いま世界の輸出量第二位のカナダの小麦生産は、二度Cの低下でゼロになると推算されるという)これは北方民族の農耕生活にとつて破滅的な打撃で、ただ南へ南へと死物狂いの南侵をすることになる。黄河の古代文明は殷の侵入によって崩壊する。殷の建国はBC一五五〇年ごろ(藤堂辞典の中国文化史年表)。

殷に亡ぼされた黄河の古代文明の担い手は南方へ四散したが、その一部が西日本へ来て倭人になった、というのが鈴木氏の説である。とするを減じた周の時代に「越常雉を献じ、倭人暢草を貢す」ということをした倭人や越常は、昔の古菓(黄河流域)を訪問したことになる。

縄文人がそのまま弥生人になつたとは考えにくく、両者の間に渡来人という媒介をおく必要があること、

東日本や九州南部の人々とは異質の存在として西日本に蟠踞した倭人の大勢力を考えると、その渡来人も小人数の細々とした渡来ではなく、かなりの大勢力が先住民族を排除して割り込んだものと思われること、などから鈴木氏の説は魅力がある。その先住民族の言語にアイヌ語があつたらしいことは、種子島、鹿児島などの地名がアイヌ語の痕跡がある(これについては種子島の医師、故・最上宏氏の「鹿児島県地名考」がある)ことから知られる。

その割り込みは、倭人内部の権力争いにすぎない出雲の国譲りや天孫降臨よりも遙か以前のことであつたらう。そのころ縄文人が衰退期を迎えたとすれば、その割り込みに対し抵抗力が弱かつたであらう。

古田先生と行く古代史の旅

◎内モンゴルからシルクロードへ
期日 8月17日(日)〜27日(木) 11日間
費用 五七八、〇〇〇円

行程 ①成田→北京→夜行列車泊②フホホト(博物館、王昭君墓ほか)泊③列車で包頭へ。市内見学、泊④列車で蘭州へ、泊⑤博物館ほか見学、泊⑥空路ウルムチへ。シルクロードの出土品を展示する博物館ほか見学、泊⑦バスでトルファンへ。三日間にわたり高昌古城、交河古城、アスターナ古墳、ベゼクリクチ仏洞ほか見学、泊⑧トルファン泊⑨午後ウルムチへ、泊⑩出発まで自由行動。空港北京へ、泊⑪北京→成田。

※ 〆切日 7月15日 定員15名
お申し込みは、朝日トラベルへ。
(03-1542-1745)